

小諸なる古城のひとり
 雲白く遊子悲しむ
 緑なす繁縷（はこべ）は萌えず
 若草も藉（し）くによしなし
 しろがねの衾（ふすま）の岡辺
 日に溶けて淡雪流る



千曲川辺では雪解けの季節が訪れてもハコベは芽吹かないようですが、団地内の陽だまりにひっそりと息を潜めて春を待つ姿が目にとまりました。いずれ野草も本欄で取り上げてみたいと思っていましたし、季節柄、七草粥でおなじみの「春の七草」の重要メンバーでもありますので、その先駆とさせていただきます。

さて、ナデシコ科ハコベの語源は、白い帛（はく：絹布）を思わせる、へら型の5弁花に基づく「帛べら」（万葉仮名では「波久倍良」というのが変化したものというのが定説になっています。他に、葉の配列の良さから「葉配り」が、茎がよくはびこり繁茂することから「はびこる」が、それぞれ転訛したという説もあり、いずれももっともらしく聞こえます。



また、学名は「Stellaria neglecta」ですが、「Stellaria（ステラリア）」とは、ラテン語の「stella（星）」が語源で、花の形が星形をしていることから名付けられています。でも、私にはピースサインを5つぐると環を作っているように見え、その小さく愛らしい姿がいじらしく感じられてなりません。いつの日か平和のシンボルとして普及しないものかと密かに願っています。「neglecta」は、「見逃しやすい、つまらない」を意味しています。ちょっと可愛そう。

「朝しらげ」「日出草」などの異名もあります。朝日が当たると花が開くことからの命名ですが、こっちの方が風情を感じます。

アイヌの民話では、泥と柳とハコベを使って神様が人間を創ったとされています。泥が体に、柳が骨に、ハコベが髪の毛になったそうです。それだけ身近な植物だということが伺えます。

実は、一般にハコベというと、ミドリハコベとコハコベを特に区別せずに混同して呼んでいます。最近はこれにウシハコベまで参入してきました。細部の違いは多々あるのですが、ひと目で見分けるのは難しいものがあります。ただ、ミドリハコベ以外は近年の帰化植物なので、アイヌ伝説も春の七草もミドリハコベということになります。

どうでもいいことですが、ウサギの飼育当番をしていた時、エサに困るといつもハコベをあげていました。狂ったようによく食べてくれ、とてもいいことをしたような気分になりました。正岡子規の句にも「カナリヤの餌に束ねたるはこべ哉」とあります。遠い記憶に「ひよこ草」と呼んでいたような気がします。その一方、若かりし頃に「春の七草を天ぷらにして食べる会」を催した時でした。数時間後に全部戻してしまいましたっけ。トホホ…。